

短篇小説の部選評

井上 孝雄

いでしょうか。その様な思いが伝わります。なぜ、隣に座って会話を始めたのか後半で明らかになり小さな驚きを誘います。人とのつながりの大切さ、やさしさについても語られます。日常の些細な状況を描いていますが存在感のある小説でもあります。

今年コロナ禍の中で実施されたコンテストでした。高校生の多くが数か月間登校できず自宅での生活：教室で学習することも、部活動で汗を流すことも、友人と些細な話題で笑うことも、全ての日常が奪われました。その中で高校生コンテストです。応募数は昨年度より弱冠下がったものの例年以上にレベルの高い三十作品を審査することになりました。最優秀賞と優秀作品二編について論評したいと思います。

最優秀賞『星空色の序章』、静かな小説です。学校帰りに友人を見つけた男子高校生が隣に腰を下ろし語り合うところから始まります。「星空は何色かって考えたことある…」。夜の空にきらめく星々は一体何色と表現すればいいのか。様々な色の候補が挙げられますが、どれも過不足の感、何が本当なのか分からない。世の中、多くの「常識」と呼ばれるものが本質を見えなくしているのではないのでしょうか。現代は多様な情報にあふれ何が真実か見えにくくなっています。巷の常識を鵜呑みにせず多様性に寄り添う、そのことが求められている時代なのではな

優秀賞の一つが『文通』。社会人となったある日、高校時代の友人から届いた一通の手紙、そこには苦い思い出が。「私」は自分らしさを求めて生きているつもりでも何が「人生の正解」かわからない：一体自分らしさとは何なのか、焦燥感だけが積もる。人を愛することは理屈ではないはず、この小説も多様性について描いています。タイトルにもう一工夫を。力強い文体の小説です。

「春が死んじゃった…」で始まるのが『桜彼岸』。コロナ禍により奪われた日常、炎天下の上野公園でないはずの桜並木を描く若い画家、過ぎ去る季節を弔うために。しかし、満開の桜は蟬に喰い尽くされてしまった。失われたものは現実にはかなわないのか、しかし、真に失われたものは何であったのか…。シニールな雰囲気のある作品です。

冒頭述べましたが今年度の作品はどれもレベルの高いものでした。外出もままならない環境の鬱屈を創作に向けたということでしょうか、実際のところはわかりませんが平生の日常が奪

われたからこそ文学活動を行なうことは値千金のようにも思います。

毎年感じるのでありますが、若いエネルギーは本当に素晴らしい。今現在、失われたものを嘆くのではなく今出来ることを充実させて欲しい。来年も高校生たちの逆襲に出会えることを楽しみにしたいと思います。

●井上孝雄(いのうえ たかお)

東京都出身。國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了。高等学校国語科教員。筑摩書房地域教科書編集委員。元文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課研究員。國學院大學国語教育研究会、日本国語教育学会、日本文学協会国語教育部の会員。高等学校の国語科教材について論文の執筆や学会に於ける発表等の活動をしている。最近執筆の論文。「村上春樹『レキシントンの幽霊』論——作品の魅力と学習材としての魅力——(二〇一五年)。「三つの小さな物語——学習材としての川上弘美『水かまきり』論——(二〇一六年)。「主権者教育についての一考察——村上春樹『青が消える』(Losing Blue)を教室で読む——(二〇一七年)。「学習者と作る楽しい古典の教室——『伊勢物語』のスキット授業——(二〇一八年)」。研究発表、「コミュニケーションの多様性について考える——川上弘美『水かまきり——(二〇一九年日本国語教育学会、第七十七回高等学校部会)